

# A pilot study exploring the association of morphological changes with 5-HTTLPR polymorphism in OCD patients

本田, 慎一

<https://doi.org/10.15017/1931801>

---

出版情報：九州大学, 2017, 博士（医学）, 課程博士

バージョン：

権利関係：© The Author(s) 2017. This article is distributed under the terms of the Creative Commons Attribution 4.0 International License



(別紙様式2)

氏名	本田 慎一			
論文名	A pilot study exploring the association of morphological changes with 5-HTTLPR polymorphism in OCD patients			
論文調査委員	主査	九州大学	教授	須藤 信行
	副査	九州大学	教授	神野 尚三
	副査	九州大学	教授	吉良 潤一

### 論文審査の結果の要旨

強迫性障害は、これまでの臨床学的、薬理学的研究により、その病態にセロトニン神経系の関連が示唆されてきた。構造学的な画像研究においては、強迫性障害患者でいくつかの神経解剖学的な異常が見つかっている。しかしながら強迫性障害の病態解明において、遺伝子と神経解剖学的な関連解析研究は十分行われていない。本研究では、40名の強迫性障害患者と40名の健常対照者との間で、セロトニントランスポーターの転写調節部位に存在する繰り返し多型である5-HTTLPRと灰白質体積を調べ、2要因の分散分析を行った。その結果、2群間比較において、患者群は、健常対照群に比べて、右海馬における灰白質体積の減少を認め、左中心前回における灰白質体積の増大を認めた。強迫性障害患者の5-HTTLPRと右の前頭極に強い有意傾向を認めた。

以上の結果は、特定の灰白質領域の神経解剖学的変化が、強迫性障害における5-HTTLPR多型の間表現型である可能性を示している。

以上の成績はこの方面の研究に知見を加えた意義あるものと考えられる。各調査委員より専門的な観点から論文内容及びこれに関連した事項について種々質問を行ったがいずれについても適切な回答を得た。

よって調査委員合議の結果、試験は合格とした。

なお本論文は共著者10名以上であるが、予備調査の結果、申請者本人が主体的役割を果たしていることを確認した。